
真剣で私に恋しなさい！！ 拳と脚とブラボー

大爆掌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！！ 拳と脚とブラボー

【Nコード】

N9026Q

【作者名】

大爆掌

【あらすじ】

まじこい第二期とアニメ化と聞いて勢いで書き上げました。

不定期更新で、駄文ですが楽しんで読んでいただけると幸いです。

プロローグ

目が覚めたら目線が低くなっていた。

俺は生まれてこの方平々凡々な人生を歩んできた。

普通の家庭に生まれ、普通の高校に通い、中級の大学に進学して日々を過ごしていた。

そんな生活に俺は退屈していたのかもしれない。

その日も深夜のコンビニでのアルバイトが終わり、布団に包まり眠っていたはずだった。

しかし、目が覚めると河原で自分が寝ていることに気がついた。

夢でも見ているのでは無いかと頬を抓ってみるが、痛いと感じた。

ここはどこなのだろうかと思い立ち上がると目線が低くなっていることに気がついた。

ついでに手も足も体も小さくなっていた。

「何でああああ——！！！」

ふと地面を見ると何か書かれた紙が置かれていた。

その紙には

ごめんね。君 間違っ^て殺しちゃったから、別の世界で転生させた
ちゃった！（笑）

君の好きそうな能力と少しだけ運氣上げといたから頑張^ってねww
www！ by 神

軽いノリでの神様からの御告げ？が書かれていた。

「（笑）でもwwwwでもねええ——！！」
俺は紙を引き裂きながら叫ぶのだった。

はい、そんなこんなで転生者です。

神様からのムカツク御告げの書かれた紙を見てから頭の中に情報が流れ込んできました。

この世界のこと能力のことなど色々だ。

現在俺は両親と共に河原で遊んでいるらしい。

「おゝい和馬！戻っておいでえゝ！」

「はゝい！！！」

いつの間にか終わってしまった平凡人生
始まってしまったこの人生

とにかく今度は、退屈しない楽しい人生にしよう

ちなみにこの世界は

「おや？何か光ったなあ。」

「あれは川神院の方かしら？」

はい まじこい の世界です。

プロローグ（後書き）

能力の紹介は次回

第1話 友情とブラボー

俺の名前は 前山 和馬 ピッチピッチの6歳児DEATH

すみません。すみません。石を投げないでください。自分調子こいてました。

転生したと分かってから少し時間が経った。
もうこのちびっ子ボディでの生活にも慣れ、神から貰った能力も確認が完了した。

初めのうちは新しい生活（人生）に抵抗があっただが、俺の環境適応

能力が高かったのか
はたまた精神が体に引つ張られたのか楽しく生活しております。

「カズマ、何してるのー？」

「いやちよつと読者様に現状報告を」

俺に喋りかけてくる白い髪と白い肌のかわいい少女

この子は 前山 小雪（旧姓 榊原 小雪）

学校の帰り道ボロボロな姿でフラフラと歩いていたため保護したの
ち、自宅に連行？

その時は両親が燃えに萌え（誤字にあらず）児童相談所に即効駆け
込み、あっという間に小雪の母親は塀の中、そして小雪を養子にし
た。

両親いわく「男の子の次はかわいい女の子が欲しかったんだ」
いい人たちなんだが、少々天然でもある。

「あーちようちよだ」

「小雪！そっちは道路だぞー！」

訂正、この子も天然だ。

「おやおや、ユキにも困ったものですね。」

「そうですね若。」

「見てるんなら止めるよ！」

こいつらは川神市にある葵紋病院の院長の息子の 葵 冬馬
同じく副院長の息子の 井上 準

こいつらとは同じ学校の同じクラスで、小雪がよく懐いていたため
その繋がりで友人となった。
ただ準には悪いことをした。

あれはある日曜の昼間だった。

冬馬たちと遊んでいるとポカポカ陽気に当てられて準が昼寝をし始めた。

これはイタズラのチャンス到来と思い、冬馬と小雪と共に準の額に
“肉”とか眉毛とか髭やらを描いて笑っていたのはよかったんだが、
小雪がいつのまにか剃刀で準の髪という髪をすべて剃ってしまった
んだ。

そのせいでかは分かんが、準が悟りを開いたようにロリコンに目
覚めた。

YESロリータ！NOタッチ！

YESロリータ！NOタッチ！

うん、社会も末だね

「おや 和馬？何をそんなに黄昏ているんですか？」

「いや、今までの人生を振り返っていただけだ。」

「おまえの人生ってなんだか苦勞に塗れてそうだな（笑）」

「うるせえぞハゲ！」

「ハゲハゲ〜」

「いや、おまえらがハゲにしたんだろ。ひどくね。」

こんな感じの毎日を送っています。

「そういえば冬馬、準もだけどよ最近なんか暗い雰囲気だけど何かあったのか？」

「うんうん、何だか二人ともグロイよ。」

「小雪、グロイじゃなくて暗いな。」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。」

「嘘だな。」

「嘘だ。嘘だ。」

「若、誤魔化してもこいつらには分かっちゃうみたいだ。まったく、バカなくせに勘だけはいいんだな。」

「バカとはなんだ、バカとは。」

「そうだ、そうだ。ハゲのくせに生意気だぞー。」

「ハゲ言うな！」

「そうですか。どうやらあなたたちには分かってしまうのですね。」

「それで何があっただんだ？」

「信じていたものに裏切られたとでも言うんですかね。私は父に憧れていたんです。父のような他の人に尊敬される人間になりたいかつ

た。しかし、現実是非常なものです。実は父は病院の立場を利用して医療品の横流しをしていたんです。そして準も院長の右腕である副院長の息子。私たちには悪事に染まっている男たちの私はあの男と同じ血が流れているんです。」

「それで最近おまえらブルーになつてたのか。」

「軽く言つなよ。俺たちはそいつらの跡を継ぐんだからよ。」

「ん？なんでだ？」

「なんでって。さっきも話した通り俺と若は悪人の子供だ。蛙の子は蛙っていうだろ。」

「宿命と言つんですかね。」

「おまえらって頭が良い分頭が固いな。つーかバカだな。」

「それはどういうこと意味ですか？」

「確かに親が悪人なのはショックかもしれない。けどな親は親だ。冬馬は冬馬、準は準だ。親が悪人だろうが何だろうがおまえらの人生を勝手に決める権利なんてないんだよ！！」

「うん♪冬馬は冬馬、準は準だよ。」

二人は衝撃が走ったような顔をしている。

「それにな俺らは友達だ。困った時ぐらい頼れよ。」

「あはははは！何だか憑き物が落ちたような気がしますよ。ありがとうございます和馬 ヌキ。」

「そうですね。ありがとな和馬にヌキ。」

「えへへっ」どういたしまして。」

「よし！友情のあかしに俺の秘密を二人に見せてやる。」

「何だ。秘密って？」

「興味はありますね。」

「おおー！カズマのあれだね！」

「みんな少し下がってな！」

俺はそう言い右腕を前に出しながら構える。

右手の人差指から小指まで順番に曲げて最後に拳が軋むほど強く握る

「いくぜ!!」

俺の周りの地面がきれいにえぐれる。

それと同時に俺の髪が逆立ち、背中に赤い三本に羽根が生える。最後に右腕がオレンジ色の装甲に覆われた。

「これが俺の秘密その1“シェルブリット”だ!」

「これは驚きましたね。」

「その1ということはまだ他にもあるのか?」

「あれ?二人とも驚いたようだが思っていたよりも反応が薄いな。」

「いやだつておまえ普段からけつこう人間離れしてたし、今更見せられてもな。おまえならなんでもありだなあっと思うぐらいだ。」

「そうですね。普通の小学生はただの拳で地面を割らないですし。」

ああ転生してこの体のスペックに驚きながら日々生活してたら、周りにからかう目で見られてたのね。

「ちくしょう。ならこれならどうだ!」

また地面がえぐれ、今度は足が薄紫色の流線型の装甲に覆われた。

「秘密その2 “ラディカル・グットスピード（脚部限定）” ！！」

俺はそう言い走り出した。

「すげえ速えな。」

「本当に和馬は人間離れしてますね。」

「あはははゝはいはいゝゝ」

これにも特に驚かない。

いや、怖がらないのはありがたいが、これはこれでなんかさびしいっていうかくやしいな。

「ならば最後にこれだ！！いくぞ小雪！」

「ついにあれをやるんだね。」

俺は神に3つの能力が与えられた。

それは俺が前の人生でかつこいいと思っていたものだった。

そしてこの最後の能力は前の2つの力のせいか少し違う物となっていた。

さらに地面がえぐれる。

俺は銀色のテンガロンハット風の帽子・長手袋・襟の長いコート・スラックス・ブーツを着ていた。

武装錬金^{メタルジャケツト}に出てくる防護服の武装錬金“シルバースキン”である。

本来 核鉄^{かくがね}が必要なはずのこの能力がアルター能力に変質していた。

「片手に♪」

「ピストル！」

「心に♪」

「花束！」

「唇に♪」

「火の酒！」

「背中に」

「「人生を！！」」

「キャプテンブラボー！只今参上！！」

「さんじょー！」

俺は小雪と共に冬馬たちに背を向けポーズを取る。

「いや和馬、今のお前ただの不審者だぞ。」

「和馬ではない！今の私はキャプテンブラボー！それ以上でもそれ以下でもない！！」

「かつこいいですよ和馬。いえキャプテンブラボーでしたか。」

「あははは」 背中 に 人生 を！」（ツビシ

俺はシルバースキンを解除する。

「そんなわけで俺は生れてからこんな能力を持っていた。こんな変な俺だがおまえらの友達でいいのか？」

「当たり前ですよ。」

「さっきおまえが言っただろうが。どんな力を持ってもおまえはおまえだ。」

「和馬、マシユマロあげるよー。」

「ありがとな。」

お互いに友情を確かめ合った一日だった。

「ところで和馬。」

「何だ？」

「この穴ぼこだらけの地面はどうするんだ？」

「………準！後は任せた！！」

「準、任せましたよ。」

「まかせた！」

小雪と冬馬をおぶさってラディカル・グッドスピードを展開する。

「さらばだ！！」

素早くその場から離れる。

第1話 友情とブラボー（後書き）

こんな感じの話でしたがどうでしたか。
読んでくださってありがとうございます。

第2話 ラディカル・グッドスピード

ハロー全国の読者のみなさん。

毎度お馴染みの和馬君の登場だよ！

前回お互いの友情を深めあつた俺たちは今、

「いくぜ！いくぜ！いくぜ——！！！」

「きゃはははははー！」

「さすがに これは つらい ですね。」

「若 そんなこと 言ってる 場合じゃ ってぎゃああああ!！」

地獄絵図になっていた。

数分前

只今日時は月曜日の朝

全国の多くの学生にとってこれほどツライ日は存在しないだろう。
俺もその一人である。

「zzzzz・・・」

登校時間ギリギリまで寝るそれが俺のジャスティス

こついうときだけうるさい母だが現在父と共に旅行中である。

神が運気を上げたと言っていたため、物は試しと町内の福引をした
ところ

当たっちゃった。一等 ペア世界旅行

あの時は笑うしかなかったなあ。

まあそんなこんなで両親は旅行に出かけたのだった。

ただ一つ突っ込みたいことは

小学生ふたり置いてくくなよな！！

いや確かに生前一人暮らしをしていた俺は家事は一通りできるが

「和馬なら大丈夫よね。」

「和馬。俺の息子なら大丈夫だ！」（ツキリ

そんな言葉を残して行っちまいやがったあのバカップル夫婦（怒

しかも

「お土産は白い恋人が良いかしら？」

「いやいや、ちんすこうが良いんじゃないか？」

なんで世界旅行なのに日本の北端と南端の銘菓！？

嫌がらせ？嫌がらせなのか？そんなもん、そこら辺のスーパーで探せばだいたいあるぞ。

そついうことがあってただいま俺は小雪と二人暮らしの状況になっている。

「そろそろ起きるか。」

俺はベットから起き上がる。

「にしても、なんか今日は目覚ましがなくても起きれたな。」
いつもは目覚ましがなってから起きるのだが

「今は何時かなあ〜っと。」

目覚まし時計で時間を確認するがいつもの場所でない

「あれ？」

「小雪、目覚まし時計知らないか？」

「う〜ん。」

小雪は眠たそうにある場所を指す。

そこには目覚まし時計の残骸と思わしき物体があった。

「はいいいいい——！！」

「小雪！目覚ましがスクラップになってらっしゃるんだが！おまえ何かしたか！？」

「うるさいから止めただけだよ。」

「止めるって、時計の息の根止めてどうするんだよ！」

「やっべえー！今何時だ！？」

居間にある時計を確認すると 8時20分

ここから学校まで歩きで30分

学校に着いているべき時間 8時30分

＼（＾o＾）ノオワタ

ピンポン♪

俺が絶望しているとインターホンが鳴る。

「誰ですか？新聞ならとりませんよ」

小雪が出てくれるが、いまだき新聞の勧誘なんてあるのか？

「俺だよ。俺。」

「かずま。オレオレ詐欺の人だったよー！」

そうか

「適当にめてあげなさい。」

「はい」

「ユキ！なんのつも ぎあああ——！！」

なんか聞き覚えのある声だったが気にしない。

それが和馬クオリティー！！

ちなみに小雪は、俺が色々な格闘技の修行をしていると「わたしもやる〜！」と言ってきたため、鍛えてみるとあら不思議。もともと持ってた才能と合わさってとんでもなく強くなった。レベルで言ったらゲームの中ボスクラス。

小雪はわしが育てた（ツキリ

今度は気と刀語の虚刀流を教えようか考え中である。

「和馬、そろそろ止めないと準がまずいですよ。」

「そうだった。そうだった。小雪もういいぞ。」

「はい！」

「準生きてるか？」

「来るのが遅いから家に来てみればこれかよ！」

生きてた生きてた

「ucci、しぶといな」

「まさかの舌打ち！？」

ただいまの時刻は8時23分
真剣^{マジ}でやばい

「この時間では4人全員遅刻確定ですね。」

「うえーい！」

「ユキ、そこは喜ぶところじゃないぞ。」

「いや！まだ手はある！」

俺はそう言い車庫まで走り出す。

俺は停めておいた自転車に跨る。

「ラディカル・グッドスピード！！」

もともとアルター能力のラディカル・グッドスピードは足に装着するだけではなく、自動車を超高速使用にする能力でもあった。それを自転車でもできるのではないかと試してみると自転車が一瞬分解される。そこには紫色のまるで暴走族のバイクのような自転車へと変貌する。

「みんな乗れ!!」

「若、なんだか嫌な予感がするんだが。」

「この際気にしないでおきましょう。」

「たつのしそうっ」

アルター化し座席も増えたため4人全員乗れるようになってる。

「なあ和馬」

「なんだ？」

「乗るのは良いとして、なんで俺だけこんな席なんだ!？」

準が乗っているのは普通の自転車の籠がある場所

「特等席だ。ありがたく思えよ。」

「いやいやいや!これあきらかに罰ゲームだろ!？」

「時間がねえ!いくぜ!!」

「人の話を聞けえ——!!」

ペダルを回すと同時にエンジンが動き出す。

「なんで自転車にエンジンが付いてるんだよ!？」

「口閉じないとした噛むぜえ！！おりゃ——！！！」

そして初めに繋がる。

「はっはっはっは！！冬馬！この世の理はすなわち速さだとは思わないか？

物事を早く終わらせれば、その分時間が有効に使える。

遅い事なら誰でもできる、20年かければ馬鹿でも傑作小説が書ける！

有能なのは月刊漫画家より週刊漫画家、週刊よりも日刊だ！！

つまり速さこそ有能なのが文化の基本法則！！そして俺の持論だ！！」

「よく この状態で 話せますね」

「はいはいいっ」

「つか！前！前！前！川が！」

進行方向には多馬川が見える。普段は橋を越えて学校に行くのだが、橋に行くとしても遠回りになってしまう。短距離に行くには川を飛び越えるしかない。

「心配ご無用！！」

自転車のタイヤが横になりホバーのようになる。スピードを保ったまま川の上を走っていく。

「すごいが さっきから風圧があああ——！！！」

「あはははー！準、すごい顔〜」

「学校が 見えて きましたね。」

見るとすぐ先に学校が見えてきた。

「そろそろタイムリミットかな？小雪、冬馬を連れて飛べ！」

「わかったー」

俺の指示に従い、小雪は冬馬を抱えて飛ぶ

「おい和馬！何かあったのか！？」

「いいからお前も飛ぶんだよ！」

準を抱えて俺も飛ぶ

操縦者を失った自転車はそのまま走りながら

ドッ——ン！！！！

爆発した。

「さらば流星5号！おまえもまた友だった！」（ツビシ

「バイバイ！」）（ツビシ

俺が爆散した自転車に敬礼すると小雪も俺にならって敬礼する。
ちなみに、流星1号〜4号も夜空に輝く星になっている

「若、無事ですか？」

「私は何とか無事です。」

「おい二人とも、死んでないで校門まで走るぞ。」

死にかけの二人を抱えて学校を目指す。

この後なんとか時間に間に合うことができた。

「3分30秒。自転車だからしょうがないか。」

「その前にまずは詫びの言葉はないのか。」

その後、俺と準は死闘を演じたことをここに記す。

余談ではあるが、後日ニュースで昼間に暴走バイクが出現したと報道されたが

俺にはいっさい関係ない。そう！いっさい関係ない！！（ツキリ

第2話 ラディカル・グッドスピード（後書き）

いまのところは小学生編をやろうと思います。
感想やアイデアがあればお願いします。

第3話 キャプテンブラボー108秘技

日曜日の昼下がり、天気は快晴

俺と小雪と冬馬とハゲは河川敷に来ていた。

「おいぃー！！なんで俺だけ名前じゃないんだ！」

地の文を読むんじゃないハゲ！！

俺たちはまあ河川敷に遊びに来たんだが、それ同時に他の目的でも来ていた。

目的は小雪の気の修行である。

あとの二人は興味本位で見学に来ている。

「それじゃあ修行を始めるぞ小雪」

「はーい」

「つと、その前に」

俺はアルター能力のシルバースキンを発動する。

「片手にピストル！心に花束！唇に火の酒！背中に！人生を！！」

キャプテンブラボー！お

呼びとあらば即参上！！」

「なあ和馬。ブラボーになる意味あるのか？」

「特に意味はないが、あえて言うのなら この方がカッコイイからだ！！」

「わーい！ブラボーだー♪」

「何度見ても不思議な能力ですね。」

閑話休題

「戦士 小雪には気の修行をしてもらう。だがその前に、気について知ってもおう。」

「おい、口調変わってるぞ。」

「準、きつと役になりきっているんですよ。」

小声で二人が何か言っているがスルーする

これぞブラボークオリティー

「まず気は体に纏わせることで身体能力を大幅に上げることが出来る。例を挙げれば普通の拳だと岩を砕くのがせいぜいだが、気を纏わせることで鉄をも砕くことができるのだ。」

「いやいやいや！普通の人間は岩砕けねえし！」

「次に」

「おい無視するなあー。」

「一般的に気弾と呼ばれているものだ。これは体で練った気を体外に放出するんだが、気を放つには高い技術が必要になってくる、以上だ。質問はあるか。」

「せんせえよくわかりませんでしたー」

「よし！実演で教えてやろう！」

そう言つと俺は構えて気を練りだす。

「気を込めた拳は必殺技ともなるのだ！

いくぞ！キャプテンブラボー108秘技が一つ！直撃！ブラボー拳！！」

拳を地面に放つと激しい震動と共に地面が崩壊する

「そして！気弾を放つとはこういうことだぁ！！

いくぞ！キャプテンブラボーの名の元に！！

キャプテンブラボーが108秘技の一つ！

俺のこの手が真っ赤に燃える勝利を掴めと轟き叫ぶ

ばぁぁぁぁねっ！ブラボオオオオオオ！！フィンガアアアアアアアアアアア！

石波！天驚けええええええええええええん！！！！」

多馬川に向かって気弾を放つとさっきと同じく激しい震動と爆音が鳴り響き、大きな水柱が発生した。

「どうだ戦士 小雪！気についてわかったか？」

「うん！よくわかったよブラボー」

「そうか、それは良かった。」

「それとね」

「ん？」

「準が流されてるよ」

周りを見ると冬馬はなんとか近くにあった岩にしがみついて耐えたようだ、準は川に落ちたようだ。

「まあ戦士 準ならば大丈夫だろう。」

「そうだね」

「まったく、毎回のことながら和馬は常識外れですね。」

30分後、準は自力で川からの脱出に成功した。

余談になるが、後日ニュースで今度は多馬川で爆弾騒ぎが起こつたと報道された。

俺にはいっさい関係ないことだ！！（ツキリ

第3話 キャプテンブラボー108秘技（後書き）

なんだか準の扱いがひどくなってきたいるが一切きにしません。

読んでくださってありがとうございます。

第4話 友（前書き）

難産でした。

第4話 友

前回から数年が経った。

つと言ってもあまり変わったことがない。
あったことと言えば

・小雪が気を習得した。

・準が小雪の気の実験台にされた。

・小雪が虚刀流の技を覚え始めた

・準が技の実験台に

・俺が新技を開発

・準が技の（略）

・冬馬に護身術を教える

・準が（略）

まあこんな感じだ。あー後、知らない間に準の防御力やら耐久性が
上がっていた。

なんでだろうなー（棒）

それと数週間前のことだが冬馬の友人を紹介された。

「紹介します和馬。私の友人の 九鬼 英雄 です。」

「フハハハハハ！おまえがわが友、冬馬の友人か！」

えっらく濃い奴だった。

「我こそは！！九鬼 英雄！皆の英雄^{ヒーロー}である！！
この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！！！」

そう言いながら英雄は服の背に描かれた龍の絵を見せポーズをきめる。

これは負けてはいられない

俺は右手を突きだす。

「俺の名前は 前山 和馬！！そしてえ、武装錬金！！！」

地面が抉られ、シルバースキンが俺に装着される。

「片手にピストル！心に花束！唇に火の酒！背中に！人生を！！！」

キャプテンブラボー！た

だいま参上！！！」

俺は英雄に背中を見せながら決めポーズをとる。

「っむ!!」

「っむむ!!」

お互いにポーズをとりながら睨みあう。

そして

「フハハハハハ！さすが冬馬の友だけのことはある！見所のある男だな!!」

「おまえもすげえ奴だな！」

シルバースキンを解除して、英雄と力強く握手をする。

「素晴らしいですね。」

「若、俺には二人の間で何が起こったのかわからないのですが。」

「考えるんじゃない！感じるんだー」

そんなこんなで俺の友達が一人増えた。

「いろんなことがあったな」

「かすまゝなにしてるのー？」

「いや、今までのことを振り返っていただけた。」

ただいま小雪と河原で修行中

今回は珍しく冬馬たちが見学に来ていない。

「トウマたち遅いね。」

「珍しいよな。あいつらいつも時間には厳しかったのに。」

小雪とそんなことを喋っていると

「和馬——！！」

焦った様子で冬馬たちが走ってきた。

「どうした二人とも？そんなにあわてて」

「大変なんです！これを聞いてください」

冬馬が準が持ってきたラジオを流す

——臨時ニュースをお伝えします。某国某州の高級ビルでテロが発生したようです。このビルでは世界の upper 階級が出席するパーティーが行われており、犯人グループはこのパーティーの出席者を狙った

犯行だと考えられます―

「なんだよこれ。」

「ねえカズマ、これってこの前ビデオが出席するって言ってたやつかな？」

「おそらくユキの言ってる通りでしょう。」

「俺達じゃあどうすることもできない。だが、和馬なら何か方法があるんじゃないか。」

「っなこと言っても俺には外国に行く術すべがない！ラディカル・グツドスピードを使っても外国に着く前に爆散する！つか元が自転車だから海を超えるほど出力がでない！」

準が悔しそくに顔を

「自転車がだめでもあれならどうです？」

冬馬が指を指す方向には河原に捨てられた廃車が置かれていた。

この九鬼 英雄 一生の不覚！

我は某国のとあるビルで行われた世界の upper 階級が出席した。

これは父の意向でこのパーティーにはパイプ作りや顔見せのために連れて来られた訳だが、そこで事件が起こった。

パーティーの真つ最中にビルが爆発した。

その爆発により周囲はパニックに陥った。

また爆発によって落下してきた瓦礫が我に向かって落下してきた。

致命傷は避けたものの瓦礫がもろに右肩に当たり、右腕が動かぬ。

ビルが爆発してからどのくらい経ったのであろうか。

時間間隔が狂ってきた。

警備員や参加者の護衛が出払っている時を狙ったように、ホールに

犯人グループが押し寄せてきた。

私の近くで小太刀を持った女が応戦しているが数が多すぎる

私はこのまま死ぬのであろうか。

だが私は九鬼英雄！ヒーローなのだ！！

「聞けえい犯人ども！！わが名は九・鬼・英・雄！！英雄である！！
英雄は決して後は見せぬ！！我が栄光の生きざま！その目に焼き付
ける！！」

私はそう言い放ちながら動かぬ体を無理やり動かし見得を切る。

すると

「良く言った英雄おおおお！！！！！！」

ビルの壁を砕いて見覚えのある友が現れた。

数時間前

「やってみるもんだな。」

捨ててあった廃車は俺の力で派手な車へと変貌していた。

「頼みましたよ和馬。」

「場所は分かってるんだよな。」

「大丈夫だ。俺が英雄に何回パーティーのことを話されたか。場所まで細かく言ってたからな！まあもしものは英雄の気を探っ探すさ！」

「ぼくもいくよー！」

「だめですよユキ。わがままを言っては。」

「そうだぜユキ。おまえが行っても足手まといになるだけだ。」

冬馬たちが小雪が行くのを止める

「いや、小雪も連れていこう。」

「本気かよ！」

「大丈夫なんですか！？」

「ああ、小雪は十分な修行を積んでるし、念のためこれを着させる。」

俺は右手をかざし、アルター能力を発動させる。

地面がえぐれ、新たなシルバースキンが生成される。
それは海賊の船長のようなシルエイトだった。

「シルバースキン アナザータイプ！！シルバースキンは核爆弾に

も耐えるぞ！」

俺はそれを小雪に着させる。

「いいか小雪！今からお前はキャプテンベラボーだ！」

「おおー！！」

俺と小雪は車に乗り込む

「冬馬！準！離れてな！」

エンジンを吹かす

「英雄を頼みましたよ！」

「怪我するんじゃないぞ！」

「おう！いつくつぜえ——！！！」

ラディカル・グッドスピードは爆音とともに走り出した。

「なあ若」

「なんです？」

「焦ってたから突っ込まなかったんですがあれって無免許う「気にしないで置きましょう。」

「・・・・・・はい」

俺はこうして英雄の元へと向かった。

まあ海を渡ったところで車が負荷に耐えられず爆散してしまったが、
気弾をロケットエンジンのよう使い空を飛んで英雄を探した。

そして

「あのビルだな！行くぞベラボー！！」

「うん！！」

俺は右腕のシルバースキンを分解し、シェルブリットを装着した。

「衝撃のファーストブリット！！！」

背中にある三枚の赤い羽根の1枚が壊れ、推進剤になる

「おおおおおりゃああああああ——！！！！！！」

ビルの壁の一部の壁を破壊しながら侵入する

その際犯人グループと思わしき数名を余波でぶっ飛ばした。

進んでいくと英雄の声が聞こえてくる

「聞けえい犯人ども！！わが名は九・鬼・英・雄！！英雄である！！
ヒール

英雄は決して後は見せぬ！！我が栄光の生きざま！その目に焼き付けろ！！」

「良く言った英雄おおおお！！！！！！」

俺はそのまま声の方向の壁を壊し突っ込んでいった。

「片手に」

「ピストル！」

「心に」

「花束！」

「唇に」

「火の酒！」

「背中に」

「「人生を！！」」

「キャプテンブラボー！！」

「同じくキャプテンベラボー！！」

「ただいま参上！！！！」

ホールの真ん中で小雪と共にポーズをとる

「なぜ来たのだ和馬！！」

「友人を助けるのは当たり前だ！！それに、冬馬たちに頼まれたしな！」

ベラボー！英雄の周辺警護を！俺は

犯人をたたきのめす！！」

「らじゃーっ」

「おいてめえら！人の友達をよくもひどい目にあわせてくれたなあ？小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする準備はOK？」

反応を見るがどうやら日本語が通じていないらしい
それどころか俺に向かって銃を撃ってきた。

「効かん!!」

シルバースキンがすべての弾から俺を守る

「てめえらに俺の本気をみせてやるよ!」

俺はシエルブリットを上 to 構える

ビルの残骸などが消えていく

「これが！俺の！輝きだああああ!!」

シエルブリットが変化する

右腕がさらに大型化し、背中の羽根が一枚羽の風車に変化する。

帽子をしているためわからないが顔の右半分に突起物が形成される

「シエルブリット・バースト!」

手甲や前腕部の装甲が開き、留め金のような装甲が外れる。

手甲内部にある物が回転して推進力を爆発的に上げ、背中の風車が
回転し体が浮かび上がる。

「おおおおおりゃあああああああ……！！！！！！」
光り輝く右腕を犯人グループに放っていく

数分後

穴だらけになった会場と犯人の屍の山が出来た

「大丈夫だったか英雄！？」

「ああ我は無事だが、犯人は殺してしまったのか。」

「いや、全員6分の4殺しに抑えた」

「あははー、すごいねカズマ、ぼくなら全員やっちゃってるよ」

こうして事件は解決した。

その後の話だが、英雄の右肩の怪我だが俺が気を流し治癒をしながら

ら病院に搬送された。

なんとか日常生活には支障をきたさないほどには回復したが、英雄の野球の投手としての人生は終わってしまった。動かすのには支障をきたさないが微妙な制球とかするための、ほんの僅かな腕や肘の変化ができなくなってしまった。そのことで落ち込んでしまったこともあったが遅れてやってきた冬馬や俺達の励ましにより復活を果たした。

また、英雄に従者がついた。その従者はなんと会場で小太刀を使い犯人と戦闘を行っていた女性だった。何でもあの時の英雄の姿に魅かれたらしい。

まあそんなことは置いといて今現在の問題は

「なあ小雪」

「なあ〜に〜」

「帰りどうしよう？（汗）」

「うえ〜い」

数十分後

英雄になんとかしてもらおうという結論に達した。

第4話 友（後書き）

感想お待ちしています。

読んでくださってありがとうございます。

第5話 その後の話（前書き）

今回の話は短いです

第5話 その後の話

前回英雄を助けた俺は現在、

「うりゃ〜」

「はぁぁぁ！」

小雪と組み手をしています。

最近になってだが小雪の武術家としてのレベルが上がりすぎて、俺と本気で組み手をするのに河川敷では色々危険なため困っていた。
（まあ街中でハルマゲドン起こすようなもんだからなあ）
英雄にその話をしたら場所を提供してくれることとなった。
そして今、全力の小雪と組み手をしているわけだが

「薺^{ひま}薇あー！！」

体重と気に乗せた蹴りが俺に襲いかかるが

「っていー！！」

蹴りを拳で相殺する。

予想以上に強くなっていました。

興味本位で教えた虚刀流と気での身体能力向上による近接戦闘は元より、距離をとっても気弾を放つてくる。

なんとも厄介な戦闘スタイルになったもんだ。

「小雪！本当に強くなって兄ちゃんはうれしいぞお！！」

そう言いながら正拳突きを放つ

「えへへカズマにほめられたあー」

小雪は俺の正拳突きを飛んでかわした

「七の奥義いー！落花狼藉らくわろうしやく！！」

かわしたついでに足を振り上げ踵落としを放つ

バックステップでかわすと踵落としが地面に決まり、地面が隕石が落ちたように陥没する。

「シルバースキンが無い状態で当たったら洒落にならないな。」

「それじゃあいくよおー！七花八裂しちかはちれつ！！」

一気に距離を詰めて虚刀流の七つの奥義を連続で叩き込んで来る。

「こつちも決める！衝撃のお！ファーストブリットオオオオ！！！」
脚にラディカル・グッドスピードを装着し、踵部分のピストンを打ち出し同時に側面部の噴射口から噴き出す勢いで、小雪の技が当たる前に蹴りを放った。

「フハハハハハ！和馬よ！おまえの戦い、しかと見させてもらったぞ！！」

「いやいや、助かったぜ英雄！さすがに河川敷じゃこんな風におもいつきり戦えないからなあ。」

「このような高度な戦いが間近で見られるのだ！このぐらい安いものだ！元より友の頼みは叶えるものだ！！！！」

「流石英雄様！友思いそのお姿に、このあずみ感動いたしましたあー」

前回の事件から英雄のメイドとなった 忍足 あずみ が合いの手を入れる。

「それはともかく我が友 和馬よ！おまえに提案があるのだが！！」

「ん？なんだ提案って？」

「冬馬たちと共に我が下で働かないか？」

あのテロの後の話になるが、俺や小雪に説得されてから冬馬たちは数年かけて親の悪事の決定的な証拠を集めていた。その証拠を英雄を通じて社会に公表した。

その影響で川神市民の多くに慕われていた葵紋病院は衰退の一途を辿った。

冬馬たちの親は潔くすべての罪をかぶった。

まあ、そんなわけで冬馬たちは晴れて自由の身になった。

そして現在、冬馬や準は自分の進むべき道を見つけるため また、生活費を稼ぐために英雄の下でアルバイトをしている。（給料は普通のサラリーマンのお父さんが見たら卒倒もんだが）

「今現在、九鬼財閥の警備部の人材が不足している。それに和馬自体の能力も高い！それ相応の給金も出そう！！どうだ和馬！我が下で働かないか？」

「魅力的な提案だな！だけど断っていいか？」

「てめえー英雄様の話を断るなんていい度胸してるじゃねえーか！」

いきなりメイドのキャラが変わり小太刀を構えて殺気を放ってくる

「良いのだあずみ！！」

「っは！差し出がましいマネをしてしまい申し訳ございません！！」

「すまねえな英雄。俺は面白おかしく自由に生きたいんだ！それにまだ将来のことはゆっくり考えたいんだ！まあ何か困ったことがあったら言ってくれ。全力で協力しよう！！」

「ぼくも」

回復した小雪が答えた。

「フハハハハハハ！心強いことこの上ないな！！」

こうして今日もまた日が暮れて行った。

第5話 その後の話（後書き）

そろそろ川神学園の話に入ろうと考えています

第6話 怒り

俺たちは高校1年になった。

前世では160cmそこそだった身長がこの数年で180cmに成長したのには感動した。

冬馬たちも色々成長した。

もともと顔が良かった冬馬は色男とも言えるルックスに

ハゲは頭の照りとロリコンに磨きがかかった。

小雪は身体的には成長したんだが、

「何で毎回目覚ましを破壊するのかなあこの子は!!」

現在俺たちは毎回恒例と化した自転車4人乗りでの移動を行っていた。

「だつてうるさいんだもん！」

「うるさいからって気弾で跡形もなく吹っ飛ばす奴があるか!!」

「そんなことより前見て運転しろ！」

「だいぶこの自転車にも慣れましたね。」

今回は時間に余裕があつたためラディカル・グッドスピードを使つていない。

そのためいつもと比べて安全運転ではある。

ちなみに、この自転車はついに100号という大台に乗った。

「ああ、夜空の星になつた流星199号たち、おまえたちは俺の中に生き続けているぞ。」

「和馬は詩人ですね。」

「自分で破壊しといて何言つてんだこいつは？」

「うるせえハゲ！」

「ハゲハゲ〜」

やはりあまり変わっていない俺たちだった。

俺たちは多馬大橋に到着した。

この橋は別名 変態の橋と呼ばれている。

奇抜というか変態のような生徒が次々と登校していくからだと言われているが、

「そんな奴いるのか？」

「よし和馬、鏡見てこい。変態が映ってると思うぞ。」

「小雪、殴れ。」

「うえい」

「つちよ！最近この子の拳、洒落にならないんですが！」

そんなバカな話をしていると

「フハハハハハハハハハハ！！！」

人力車に乗って英雄が登校してきた。

「おはよう、庶民！……我こそは！……九・鬼・英・雄！皆の英雄である！この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！……」

「素敵です、英雄様つ！」

これが俺たちのいつもの風景になっている。

「うっす、英雄！」

「おはようございます、英雄」

「うむ、和馬に冬馬よ！今日も元気そうで我はうれしいぞ！」

「慈悲深いそのお姿、感動です！」

「それでは友よ、学校で会おうぞ！いけえ！あずみ！！」

「了解しました、英雄様あ——！」

人力車とも思えない凄まじいスピードで橋を渡っていった。

俺たちは1年Sクラスに所属している。

Sクラスというのは特別進学クラスのこと、学業が優秀な生徒が集められている。

まあ俺は前世で大学生って言うてもそんな頭が良かったわけではない。

冬馬などの助けと日々の血の滲むような努力でなんとかSクラスにいるのだ。

「なんで小雪は普段ちゃんぽらんなのに頭が良いのだろうか。」

「カズマがバカなだけだよー」

「チョオーッブ！」

小雪の額にお仕置きのチョップをくらわせる。

「まったくこの子は、最近反抗期にでも入ったのか？」

「まあまあ落ち着いてください和馬。もうすぐ教室ですよ。」

教室に入ると自然と視線が集まるがすぐに無くなる。

「やっぱりなんか殺伐としてて、この雰囲気には慣れないなあ。」

「まあ良くも悪くもプライドの高い奴らが多いからな。」

「みなさん選民意識が強いですからね。」

「ふん、分かってるじゃないか学年一位くん！」

声のした方向をみるとなんだか偉そうな態度の男が席に座っていた。

「このSクラスには僕のような優秀な生徒が集まっているんだ。それにしても、よく君みたいのがこのクラスに入れたね。」

こいつは結構前から俺たちに絡んできてる。いつも自分より成績のいい冬馬を妬んでいるようだ。貴族と繋がりのある家の息子らしいが、とにかくうぜえ

「ああそうか、何か汚い手を使っているんだね。どおりでテストの点が高いわけだ。何せ学年一位の犯罪者の息子の友人なんだから。」

その発言と同時に教室の扉が勢い良く開かれた

「貴様あ——！！我が友人を愚弄するかあ——！！！！！！」

「英雄様のご友人を馬鹿にするとは、いい度胸してますね　お命頂戴しますよー！」

「な、なんですか九鬼君！ぼ、ぼくはただ」

「ええい！その口を閉じよ！！我が友人を侮辱することと同じ！それ相応の償いをしてもらうぞ——！！」

今にも殴りかかりそうな英雄であるが

「まあ待つてくれ英雄。」

「なぜ止める和馬！」

「これは俺の」

俺はそう言いながらワッペンを叩きつけた。

「喧嘩だ——！！」

この川神学園では生徒の自主性、競争意欲を尊重するために決闘というシステムがある。

お互いの合意があれば白黒つけて戦うことを学校が許可してくれる。

「それではこれより1年Sクラス 前山 和馬 対 同じく1年Sクラス 伊集院 敦

の決闘を執り行う！ルールは武器は一人一つまで、負けの判定はギブアップまたは気絶、10カウントを取られた者の負けとする。双方良いな！！」

学園長である 川神 鉄心 がルールの確認をする

グラウンドで行われる試合は多くの生徒が見物に来ている。その中にはどちらが勝つか賭けをしているが今の俺にはそんなことどうでもいい。

「それにしてもあなたは馬鹿ですね。剣道の県大会にも出場したこともあるこの僕に勝負をしかけるなんて。」

「・・・・・・・・。」

「なんですか今頃おじけずいて声も出せ「そのうるせえ口閉じろ！」

「なんですかそんなに怒って？そんなにあんな悪人の息子が大事だとも」

今の俺はこいつを力いっぱい殴りたい。それだけだ

「学園長」

「なんじゃ？」

「ルールでは武器は一人一つですよね」

「うむ、その通りじゃが。」

「じゃあ」

俺は右手を突きだし拳を強く握る

「シエルブリットオオオオ！！！！」

グラウンドの一部を抉る。

髪が逆立ち、右腕を包むような装甲を生成する。

「これもありですね！」

伊集院は見ていた生徒もいれて、今起きた現象に呆気にとられている。

少々驚いた様子の学園長だったが

「ふむ、いいだろう。しかし、決して殺してはいかんぞ。」

「大丈夫です！」

伊集院は何かおびえた様子で抗議を言ってるようだが学園長は何も言わない。

「それでは 始めい！！！！！」

「な、何なんですかその腕は！？」

「どうでもいいだろ！！！」

そう言い地面を殴りつけ高く飛びあがる。

「衝撃のお！！！」

背中の一枚の羽根が壊れ、推進剤となり勢いをつける。

「ファーストブリットオオオオオ！！！」

「ひい！！！」

おびえた伊集院は持っていた木刀をふるうが、それを拳で砕く。そして相手の頬に拳を殴りつけた。

「グペエ！！！！！」

そのまま地面を削り、とび跳ねながら飛んでゆく。

「死なないように手加減したんだ、感謝しろよ。」

「勝負あり！勝者 前山 和馬あ！！！」

学園長の声と共に生徒たちから歓声があがった。
伊集院は担架で運ばれていく。

「前山よ、話がある。学園長室に来なさい。」
まあこうなるわな。

第6話 怒り（後書き）

だんだん毎日の更新が難しくなってきたため、これから更新スピードが遅れると思います。すいません。

第7話 最強VSブラボー

「それではおぬしのあの力は、生れた時から持っていたのかの？」

「はい、そうです。あの手甲を入れて3つの力を持っています。」

「なんと！？3つもか。」

前回相手をぶちのめしたのは良かったんだが、現在アルター能力について根掘り葉掘り学園長に聞かれております。

「学長。俺の力についての話はこれぐらいでいいですか？」

「うむ、よろしい。」

「それでは退室します。」

「まあ、待ちなさい。おぬしはわしの孫娘の百代のことを知っているか？」

「この学校の生徒なら絶対知ってると思いますよ。」

川神 百代

一言でいえば最強が服を着て歩いている人物

「それで、川神先輩がどうしたんですか？」

「ふむ、最近百代と対等に戦える者がいなくての」

「それで俺に白羽の矢が立ったと」

「その通りじゃ。」

「断った場合は？」

「いや、断りたければ断れば良い。しかしの、現在遠征中の百代が帰ってきて、おぬしのうわさを聞けばどうなるか」

「もう詰んでるじゃないですか！！」

「ふおっふおっふおっふお！！」

「そんなわけで川神先輩と試合することになった。」

「何一人で喋ってるんだ？」

「察せ、ハゲ！」

現在俺たちは川神院に来ている。（なお、シルバースキンはすでに装着済み）

「おまえがじじいの言っていた奴か。」

「多分そうだ！」

「それでは試合を取り行う！見学の者は下っておれ。」

「すまないが少し待ってもらえるか？」

「良いぞい。」

「小雪い！合いの手たのんだぞ！」

「はい♪」

「おいおい、まさかここであれをやるのか！？」

「多分そうでしょうね」

見学者の冬馬たちはよくわかってるみたいだ。

「片手に♪」

「ピストル！」

「心に♪」

「花束！」

「唇に♪」

「火の酒！」

「背中に♪」

「人生を！！！」

「キャプテンブラボー！ただいま参上！！！」

「変態か、おまえ？」

「ふお、なんとも堂に入ったものじゃな。」

見ていた者の感想はまちまちのようだ。

俺の発言と共に川神先輩の発する殺気と気が膨れ上がった
負けじと俺も気を高める。

「川神流・無双正拳突き！」

「粉碎！ブラボラッシュ！」

「あははははは！」

「ブラブラブラブラブラ！」

片方は笑いながら、もう片方は奇怪な掛け声とともに拳を打ち合っ
ていく。

「まだ世界にはまだこんな強い奴がいたのか！礼を言うぞブラボ
ー！！」

「光栄だ、川神百代！！」

「これはその礼だ！川神流・星殺し！！」

気で作られたレーザーが襲いかかる

「はあ！！両断！ブラボオチョオップウ——！！」

レーザーをチョップで両断する。

両断された宇宙まで飛び出すはずだったレーザーは少しの間を
おいで大爆発を起こした。

「そこまで！この勝負引き分けとする！！！」

「ちょっと待てじい！まだこれからぞ！」

「馬鹿もん！！今の爆発で張っていた結界が壊れてしまったんじゃない！もう少し考えて戦わんか！！！」

「ucci、使えん。まあでも、なかなかおもしろい試合だったぞ。また近々やろうな！」

「ハッハッハ！こちらの良い鍛錬になった！しかし、すぐには無理だな！こちらの身が持たん！！！」

「まあまあ、そう言わずに！」

さつきからこの人獲物を見つけた肉食動物の目をしてるんですが（汗

「さらばだ！！！」

「待てえ！！！」

「キャプテンブラボー108秘技が一つ！」（ツバ

俺の言葉に反応して先輩は構えをとる

「退却！ブラボダッシュ！！」
脚にラディカル・グッドスピードを展開し、冬馬たちを抱えて颯爽と逃げ出した。

「最近こつというの増えてるような気がするならない。」

「頑張ってください和馬」

「まあ頑張れ」

「ガンバレー」

最近みんなの同情の視線が痛いです

第7話 最強VSブラボー（後書き）

ネタがそろそろ尽きてきました。（汗
感想・アイデアがあればお教えください。
読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026q/>

真剣で私に恋しなさい！！ 拳と脚とブラボー

2011年2月20日22時51分発行